

石川中央都市圏

北国街道探訪マップ

下街道編・能登街道編



石川中央都市圏歴史遺産活用連絡会

はじめに

藩政時代の北国街道は、五街道（東海道・中山道・日光街道・奥州街道・甲州街道）に次いで重要な幹線道路で、現在の滋賀県から長野県を結び、金沢と京都を往来する道は「上街道」、金沢と江戸を往来する道は「下街道」と呼ばれ、さらに、北国街道が津幡町で分岐して北上するルートは「能登街道」と呼ばれていました。今回の歴史探訪マップはこれらの街道沿線の金沢市・津幡町・かほく市の街道沿いに残る優れた文化財を紹介します。本書を手に北国街道の往時の姿を思い巡らす旅に歩いて出かけましょう。

【目次】

1. 北国街道を歩く（金沢市エリア1）
2. 北国街道を歩く（金沢市エリア2）
3. 現在の地図上の北国街道と能登街道1（金沢市～津幡町）
4. 北国街道を歩く（津幡町エリア1）
5. 現在の地図上の北国街道と能登街道2（津幡町～かほく市）
6. 能登街道を歩く（津幡町エリア2）
7. 能登街道を歩く（かほく市エリア1）
8. 能登街道を歩く（かほく市エリア2）
9. 北国街道（北陸道）の概説

※表紙写真 上段：俱利伽羅峠道（津幡町）、下段：松並木の旧金沢下口往還（金沢市）
表紙下段 「加越能三箇国絵図 加賀」正保4年（1647）金沢市立玉川図書館蔵
参考文献 石川県教育委員会 1994 歴史の道調査報告書第1集「北陸道（北国街道）」
石川県教育委員会 1995 歴史の道調査報告書第2集「能登街道1」
石川県教育委員会 1996 歴史の道調査報告書第3集「加賀の道1」

1. 北国街道を歩く（金沢市エリア1 浅野川大橋から森本地区）

このエリアは、浅野川大橋から森本地区までの北国街道を歩きます。北国街道は浅野川大橋を渡るとしばらくは国道359号線と重なります。山側に金沢の三大寺院群の卯辰山麓寺院群を横目で見ながら歩くと小坂神社参道に続く登り口にある大 lantern が目に飛び込んできます。そこを少し過ぎると国道に別れを告げ、春日町からは北国街道が良好な状態で残されています。街道沿いには戦後、新しく建て替えられた家屋が増加していますが、江戸時代後期の町家がわずかに残されています。なお、街道の途中には町地と郡方の境界の「下口の松門跡」、義経旧跡「鳴和滝」、児安神社、芭蕉句碑のある野蛟神社などがあります。街道はほぼ平坦ですが、大樋町と神谷内町辺りで2度緩やかな坂道となり、森本地区へと続きます。



灯笼（右手の道は小坂神社の参道）

①小坂神社の大灯笼

（市指定文化財）

国道沿い（北国街道）にある藩政末期の堂々とした大きさの灯笼。元は小坂神社本殿正面にある灯笼と一対でしたが道路の拡幅に伴い移転。「慶応元年 願攘災厄 富士大権現 道中安全」と刻まれています。



北国街道 春日町入り口

②北国街道 春日町口

かすがまちぐち

春日町には北国街道と重複する国道359号線から分岐する街道の入り口があります。植樹された松を目印に入ると、カラフル舗装された街道が大樋町を抜けて再び国道359号線に合流する辺りまで続きます。



鳴和の滝

③鳴和滝

なるわたき

鳴和の滝は、近くの岩の上で加賀の守護富樫氏と安宅の関を逃れた源義経らが酒宴を催し、弁慶が一曲奏で「鳴るわ滝の水」と詠ったと伝わる。これが「鳴和」の地名の由来とされています。この滝の近くには鹿島神社があります。



MAP1 金沢市エリア1-1（浅野川大橋～大樋町）

※国土地理院の電子地図に加筆掲載



下口の松門付近
（大樋町方面に向かう）

④下口の松門跡

しもくち まつもんあと

町地との境界に植えられていた左右一対の松（現在は1株の松のみ植樹）。旅の武士は松門より内側では正装し供連れの行列を立て、松門より外側では行粧を崩しました。



大樋町分岐点
（手前：二又越、奥：北国街道）

⑥二又越分岐点

ふたまたごえぶんきてん

二又越は金沢から二又を越えて越中（南砺市福光、城端町）に抜ける脇街道。二又へ向かうルートには浅野川大橋から田井町を抜けるルートと、大樋町付近で北国街道から分岐する2つのルートがありました。



野蛟神社正面
（境内左手に芭蕉の句碑あり）

⑧野蛟神社と芭蕉の句碑

ぬづしんじや ばしやう くひ

天平4年（732）に創建と伝わる。疫病が流行した時、現れた「ヌヅチの神（野と水の霊）と称する」白髪の老人のおかげで疫病が治まったのでこの地に神社を建て祀ったのが始まり。境内には「芭蕉の句碑（うらやまし うきよのきたの やまざくら）」があります。



熊野神社正面

⑨熊野神社

くまのじんじや

金沢では珍しい神社、創建年代は不明。熊野神社は熊野本宮大社・速玉大社・那智大社など三山合わせて「熊野三山」と称され、「熊野権現」とも呼ばれています。各地に「熊野信仰」を広めるために修験者が熊野の祭神の勧請を受け、この地に建てたものと考えられます。



児安神社本殿正面

⑤児安神社

こやすじんじや

養老7年（723）の創建。この地が荒地のために堰を設置して水を供給する灌漑整備をしたので「大堰宮」と称され「大樋」の地名の由来となりました。その後、児安大明神とも呼ばれ妊婦の崇敬を集めるようになりました。

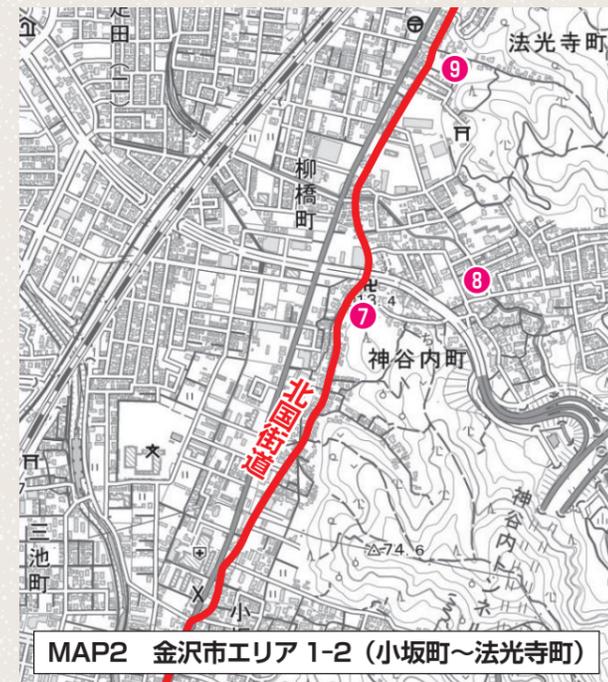


地蔵堂（右側：北国街道で城下町方面に向かう）

⑦上野の地蔵堂

うわの じざうどう

地蔵堂は神谷内町の入り口にあり、藩政時代の地蔵とされています。堂内には立像5体、頭部1体が納められています。合掌する像、左手に錫杖、右手に宝珠を持つ像などがあり、いずれも作風が異なります。



MAP2 金沢市エリア1-2（小坂町～法光寺町）

※国土地理院の電子地図に加筆掲載

2. 北国街道を歩く（金沢市エリア2 森本地区から津幡町太田）

このエリアは、森本地区から津幡町太田まで歩きます。森本駅周辺まで国道359号線と重なりますが、鉄道の跨線橋を渡ると津幡までの街道は良好に残されています。古くから森本地区の町並みは街道沿いに南北方向に長く延びています。特に森下川を過ぎた辺りから三角妻壁の農家住宅（アズマダチ）が建ち並んだ見事な集落景観が残されています。そして、この集落を程なく過ぎると石川県指定史跡「松並木の旧下口往還」にたどり着きます。指定範囲の街道の両側には松並木があり、北国街道の往時の面影が残されています。津幡町太田の間には日本で唯一の生姜の神様を祀る「波自加弥神社」があります。このエリアはほぼ平坦な道となっており、津幡町へと続いていきます。



小原越分岐点
（手前：北国街道、奥：小原越）

⑩小原越分岐点

おはらごえぶんきてん

小原越は金沢市吉原町付近で北国街道から分岐し、尾根道やその脇を通り、小矢部市五郎丸・末友に至る脇街道です。街道沿いには加越国境城跡群の切山城や松根城があります。

3. 現在の地図上の北国街道と能登街道1 (金沢市～津幡町)



郡家神社参道
(境内のケヤキは市保存樹)

ぐんげじんじや ⑩郡家神社

小原越沿いに所在する古社。延喜式内社で、天平5年(733)創祀と伝われます。元は吉原町山中にありましたが延喜5年(905)に現在地に移転しました。近くには北加賀最大の前方後円墳がかつてあり、この地は古墳時代の豪族の拠点されています。



道路元標 (菊知坂公園内)

どうろげんびょう ⑩道路元標

道路元標は路線の起点または経過地を示す標識のことです。本標識は元森本村役場にあったものを平成17年(2005)に跨線橋の脇にあるロードパーク「菊知坂公園」内に移設しました。



亀田家住宅正門
(石柱、高札は明治天皇北陸巡幸の小休所を明示)

かがはんとむらやく かめだけ ⑩加賀藩十村役 亀田家

加賀藩の十村役として近隣の農政に携った豪農の屋敷です。菓子屋「森八」は分家同族。明治天皇行幸の際の御小休所に指定されました。なお、亀田家は一方向一揆の旗頭として登場し、柴田勝家と和睦しています。その後、5代目の良周の代に帰農して十村役を務めました。 ※家屋内部は非公開



菊知家住宅表門
(建物には主屋及び附属する土蔵、表門があります)

まくちけしやうたく ⑩菊知家住宅

(国登録有形文化財)
(市指定保存建造物)
明治4(1871)年に建築。金沢における瓦葺きアスマダチ農家住宅の最古の建物と推定されています。当建物を含む北森本の集落は、北国街道の両側に一列に並んでおり、歴史的町並みの雰囲気や今に伝えています。 ※家屋内部は非公開



北国街道 (津幡町方面に向かう)

まつなみき きゅうかなざわしもくちゆうかん ⑩松並木の旧金沢下口往還 (県指定史跡)

藩政時代の主な街道には松を植樹する政策がとられていました。現在、北森本町と今町を結ぶ市道約300m(指定範囲)には現在も数本の松が植樹され、藩政当時の面影を伝えています。



田近越分岐点
(手前：北国街道、正面：田近越)

たちかごえぶんきてん ⑩田近越分岐点

田近越は金沢市北森本町と今町の境で北国街道から分岐し、松根峠で小原越と合流して小矢部市五郎丸・末友に至る脇街道です。街道沿いには加越国境城跡群の朝日山城(金沢市)・一乗寺城(小矢部市)があります。



八田家住宅正面
(建物は主屋、西蔵と東蔵があります)

はったけしやうたく ⑩八田家住宅 (国登録有形文化財) (市指定保存建造物)

台湾の烏山頭ダムや灌漑用水を建設して豊かな穀倉地帯に変え、台湾の人々から敬愛される八田與一(1886～1942年)の生家。住宅は明治38年(1905)に建築。柱材の材質や仕上げが見事で、明治後期の農家住宅の特徴的な姿をよく残しています。 ※家屋内部は非公開



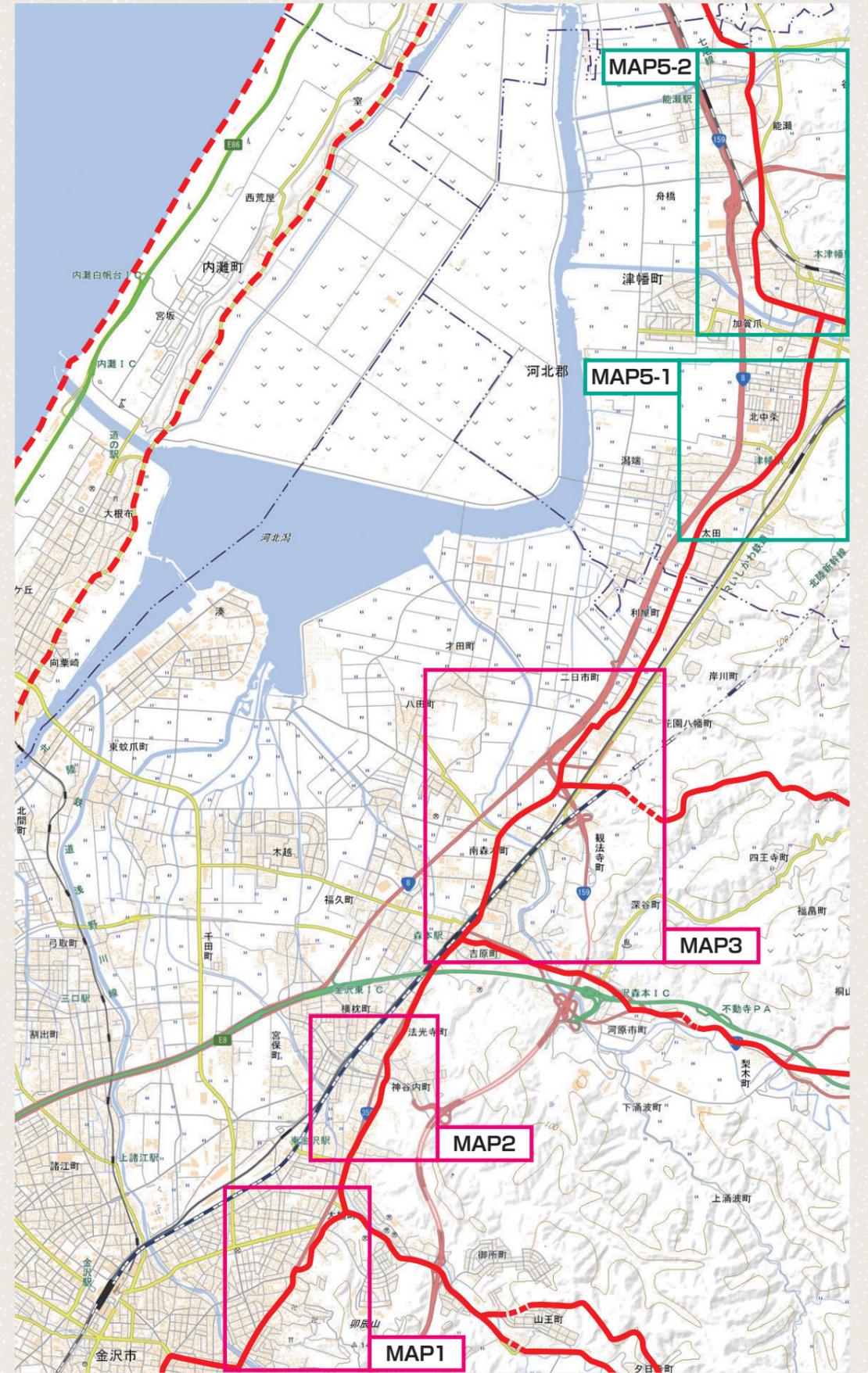
波自加弥神社 (本社に至る参道)

はじかみじんじや ⑩波自加弥神社

日本で唯一の生姜の神様を祀る神社で1300年の歴史を重ねる市内屈指の神社。毎年6月15日に「しょうが祭り」が行われ、県内外から生姜に関わる生産者・料理屋などの多数の参拝者を集めています。なお、北国街道沿いには遙拝殿があり、ここから約500m後方山手に本社があります。



MAP3 金沢市エリア2 (塚崎町～二日市町)



MAP4 金沢市～津幡町

※国土地理院の電子地図に加筆掲載

4. 北国街道を歩く (津幡町エリア1 津幡地区周辺)

このエリアは、金沢市森本地区から津幡宿までの北国街道を歩きます。金沢市の下往還松並木から花園町を通り津幡町太田に至る箇所は古い建物などは残っていませんが、所々狭い道幅や街道との接点に設けられた鳥居や石碑に街道の面影を感じることができます。津幡宿は江戸から明治にかけて何度も大火にあっており、近世の建物は残っていませんが、旧河合家の門や御旅屋橋脇のタブノキに宿場町の雰囲気が残ります。津幡宿は北国街道と能登街道の結節点にあり、荷物を運ぶための馬を加賀藩で最も多く備えていました。能登街道との分岐を右に折れば竹橋・俱利伽羅方面、左に折ればかほく市方面になります。街道分岐点は津幡城跡直下にあたり、交通上の要衝に城があったことがうかがえます。能登街道は宿場を抜け、庄住吉神社付近から旧来の狭い道が丘陵の裾を這うように続きます。越中への北国街道も宿場を抜け丘陵裾を通りながら、竹橋宿を目指します。



加賀神社

① 加賀神社

延宝元年(1673)5代藩主前田綱紀が新田開発のため瀧端新村をおこした際、諏訪神社として創建されました。明治期に加賀神社と名を変え、綱紀を祀ります。神社には綱紀の手紙や書状などが残されています。



三輪神社

② 三輪神社

北国街道北中条地内に、三輪神社への道を示す石鳥居と石碑があります。社殿は3代藩主利常夫人の天徳院が建立しています。延喜式内社の三輪神社とする社伝が残っています。



MAP5-1 津幡町エリア1 (太田～横浜)

※国土地理院の電子地図に加筆掲載



旧河合家跡

③ 旧河合家跡

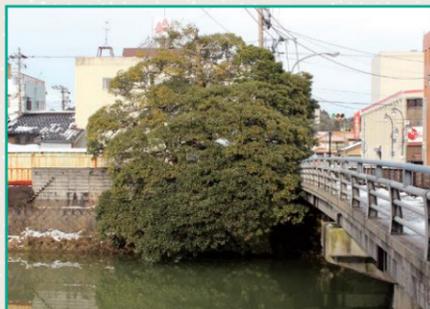
河合家は旅籠や米屋を営み、十村肝煎や肝煎などを代々務めた名家です。第9代河合理右衛門(見風)は、文化面でも活躍し、前田土佐守直躬や千代女とも親しく交流する風流人でした。通りに面した正門は昭和初期に改築されたものですが、元は加賀藩の豪商・木屋藤右衛門の栗崎居宅から移築したものです。



御旅屋跡

④ 御旅屋跡

津幡宿の本陣「御旅屋」があった場所です。松本甚之丞の母は、末森に赴く前田利家に真っ先に駆けつけ戦勝を祈りました。感心した利家が望みのものを訊いた際、母は土地を所望しました。利家は「走れるだけ走ってみよ。その分の土地を与える」といい、実際その通り土地を与えその子甚之丞を御旅屋守にしたと伝わっています。



角屋跡とタブノキ

⑤ 角屋跡とタブノキ

本陣「御旅屋」の対岸には、「脇本陣角屋跡」の石碑があります。津幡川にかかる「御旅屋橋(おやどばし)」たもとのタブノキは、樹齢700年ともいわれ、角屋の庭に植えられていたものと言います。河川拡張の際にも残された宿場町の歴史を見つめた巨木です。



北国街道・能登街道分岐

⑥ 北国街道・能登街道分岐

津幡城跡では北国街道と能登街道が分かれています。人が行き交う場所のため、高札場でもあったとされています。石碑が建立されており、この地点が宿場町津幡の原点といえます。



津幡城跡(町指定史跡)

⑦ 津幡城跡

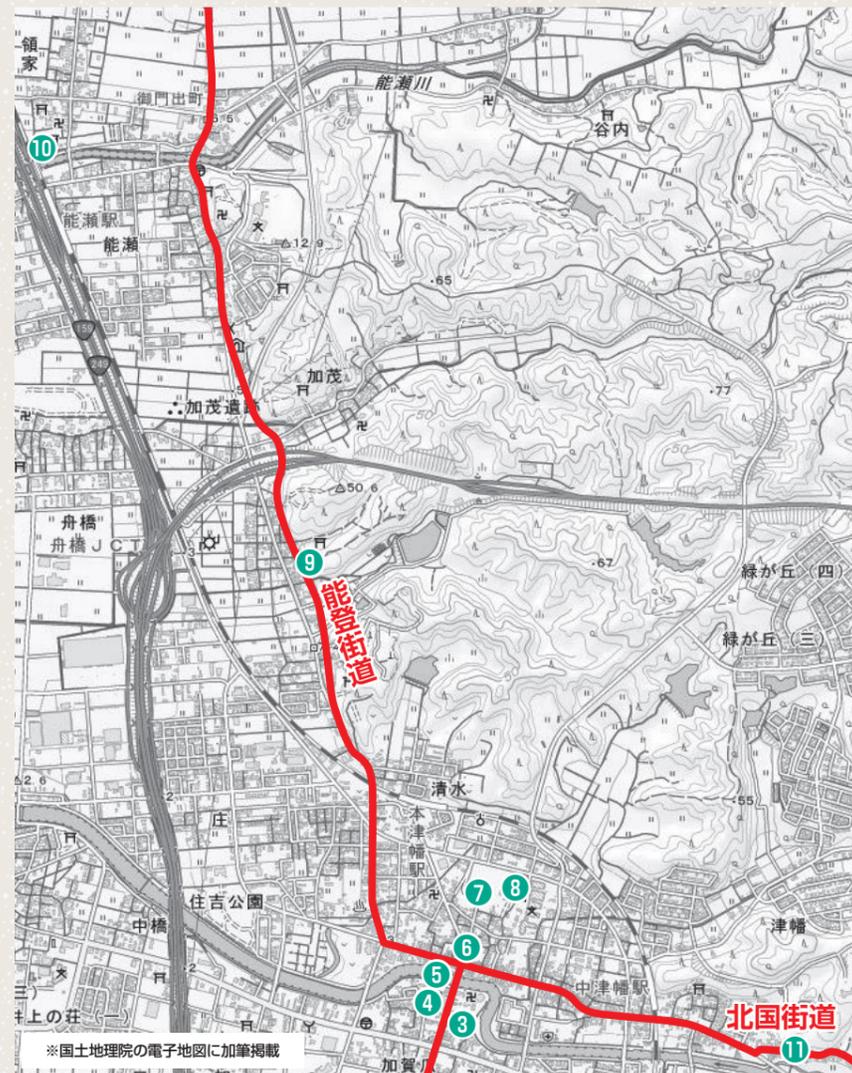
街道分岐を見下ろす小高い大西山には、利家が佐々成政に備え弟の秀継に守らせた津幡城がありました。末森合戦の際には、ここで軍議が開かれました。合戦後成政が越中に退却したため、秀継は高岡市木舟城に移り、廃城となりました。



為広塚(町指定史跡)

⑧ 為広塚

河合見風はこの地にある塚を調査し、大永6年(1526)に七尾で没した冷泉為広の塚であるとしました。その後冷泉為村・前田土佐守直躬とともに石碑を建立し、法要を行っています。明治期に現在の場所に移転しており、江戸期の碑と明治期の碑が並んで建っています。



MAP5-2 津幡町エリア1 (本津幡駅周辺)



能登街道

⑨ 能登街道

分岐点から北方向に向かうと、庄住吉神社付近から丘陵の裾に沿うように旧能登街道が走ります。古い建物等はありませんが、道幅は拡幅されておらず、当時の面影を残しています。当時、このあたりには民家はなく、松並木が連なっていたと記録されています。



能瀬道標

⑩ 能瀬道標

能瀬の日吉神社境内には、「右乃とみち 左のみち□□」と刻まれた高さ50cmあまりの花崗岩製の道標があります。河合谷・種方面からの人のために、能瀬集落の能登街道と河合谷への道の分岐点に置かれていたとされています。明治以前のものと思われる。

6. 北国街道を歩く (津幡町エリア2 倶利伽羅地区周辺)

竹橋宿を抜けると民家はなく、山道に入ります。前坂から龍ヶ峰城麓までは、簡易舗装が行われた箇所がありますが、近世の遺構は保護されており、当時の景観を色濃く残しています。中ほどまでは山中を切り通す道路遺構が続き、やがて尾根伝いの道へと変わります。地盤も弱い地区なので、当時は今よりも道幅も狭かったと思われます。倶利伽羅集落手前には急な坂道があります。十返舎一九の「方言修行金草鞋」には、倶利伽羅峠茶屋の様子やにぎわいが描かれています。当時の旅人も峠での休憩を楽しみにしたのではないのでしょうか。倶利伽羅山中を抜けるこの道は、明治11年(1878)に天皇が行幸されることから天田峠越えに新たな道が開かれ、使われなくなっていきました。そのため、今も往時の様相を味わうことができます。



一里塚跡

11 一里塚跡

ここには小高い山のような盛土があり、頂点には塚の目印として地蔵が安置されていました。昭和初期に盛土を削って、地蔵堂を建立し、現在に至っています。



竹橋宿

12 竹橋宿

倶利伽羅峠の麓に位置する宿場町で、藩政期には4軒以上の宿屋があったといえます。峠越えに備える場所でもあり、藩内でも4番目に多い67疋の馬を備えていました。



前坂

13 前坂

竹橋から倶利伽羅山中への入り口にあたる場所で、急でゆっくりとしか登れないため、「かたつむり坂」とも呼ばれました。今は風化した権現様が祀られています。「急とも 拝んで通れ 神の前」と言われていました。



切り通し

14 切り通し

山間部の北国街道には、江戸時代の風情を伝える切り通しの部分が残ります。発掘調査の結果、両側には側溝が掘られていたことがわかっています。その溝には工具によると思われる筋状の痕跡も見つかっています。



MAP8 津幡町エリア2 (倶利伽羅峠道周辺)

※国土地理院の電子地図に加筆掲載



一騎打ち跡

15 一騎打ち跡

山肌と崖が迫る非常に狭い場所で、現在は拡幅されていますが、当時はすれ違うのが難しいほど狭いことから付いた名前と思われる。江戸時代の文書にも残っており、名前の知られた難所であったと思われます。



龍ヶ峰城跡 (町指定史跡)

16 龍ヶ峰城跡

北国街道を眼下に見下ろす戦国期の山城。一向一揆が使用した後、佐々成政の支配下になり、前田利家との戦いの場にもなりました。加賀方面には入口がないため、攻撃を浴びながら越中側へ回り込まざるをえないよう構築されています。堀切や外柵形虎口を備えた山城です。



道番人屋敷跡

17 道番人屋敷跡

北国街道の管理のため、藩に命じられた道の管理人の屋敷があったとされる場所です。竹橋～倶利伽羅峠が持ち場として割り当てられていました。



三十三観音像

18 三十三観音像

幕末、街道をゆく旅人の安全を祈願し、津幡町竹橋～小矢部市石坂に2町(約218m)ごとに置かれました。地元の有力者や有志により寄進されたものです。津幡町内・小矢部市内にすべて現存しています。



馬洗い場跡

19 馬洗い場跡

岩盤をくり抜いた清水を溜める水場があった場所です。ここで、馬を休めたり洗ったりしたとされます。昭和30年代まで残っていました。発掘調査時、晴天が続いた時も水は枯れることなく湧き続けており、当時は重宝されていたと思われます。



長楽寺跡 (町指定史跡)

20 長楽寺跡

和銅6年(713)に開山したお寺です。長楽寺は参勤交代の休憩所や加賀藩の祈禱所として、興隆しました。現在の倶利伽羅不動寺は長楽寺を再興したお寺です。クリカラとはサンスクリット語に由来する不動明王の化身である龍王を意味します。



手向神社石堂神殿 (町指定文化財)

21 手向神社石堂神殿

倶利伽羅峠には古来より、旅人の安全を守る神がいるとされており、万葉集には、旅の安全を手向けの神に祈る場面が歌われています。九尺四方の笏笏石で造られた祠で、慶長19年(1614)に二代藩主利長の病氣平癒を祈願して、三代藩主利常が寄進しました。



倶利伽羅権現 (町指定文化財)

22 倶利伽羅権現

手向神社の南、倶利伽羅峠最高地点の国見山山頂に、5代藩主綱紀が寄進した祠で、「延宝五年、四社建立、松平加賀守綱利公、九月八日」の銘があります。手向神社と併せて五社権現ともよばれています。

7. 能登街道を歩く (かほく市エリア1 宇野気から木津)

能登街道は津幡町から始まり、市内では現在の宇野気や木津、高松を通り能登（七尾を経て宇出津まで）へと向かいます。ここでは、市内の内、宇野気周辺から木津の辺りのエリアを紹介します。また、このエリアは、河北潟や砂丘という地形に特徴があり、現代は江戸時代頃よりも大きく風景が変わったことも特徴です。

また、能登街道の他に金沢へ向かう道として、河北潟の縁辺（かほく市から内灘町側）を通る「潟縁往来」と、かほく市高松から内灘町に向かって主に浜辺を通る「海辺往来」がありました。これら3つの道は、季節や天気など状況に応じて使い分けていたものとみられています。

1 狩鹿野不湖とイリコ宮井戸跡

現在は水田が広がっていますが、元文2年（1737）の「賀州河北郡図籍」の絵図には河北潟が深く入込んだ「狩鹿野不湖」がありました。この不湖の縁沿いにイリコ宮（大物主神社）が位置していたといわれています。能登街道を往く旅人たちは、この神社の井戸で喉を潤し休憩したともいわれています。



大物主神社



イリコ宮井戸跡 現在は閉塞

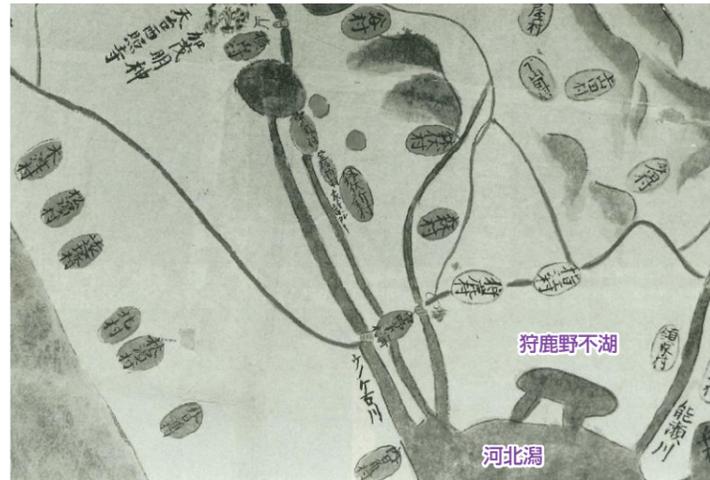
2 旧宇ノ気川と宇野気大橋

現在の宇野気大橋は、電車の線路を跨ぐための高架ですが、もともとは江戸時代の宇ノ気川（旧宇ノ気川、ウノケ古川とみられる）を渡るための橋のことを「大橋」と呼んでいました。そして元文2年（1737）の「賀州河北郡図籍」の絵図をみると、現在の宇野気あたりは「宇野気新村」であり、3本の川が河北潟に向かって流れ、能登街道がこれらの川に橋を架け横断していたことが分かります。現在の宇ノ気川は、昭和42年（1967）に旧宇ノ気川が200m東に開削移行したものになります。

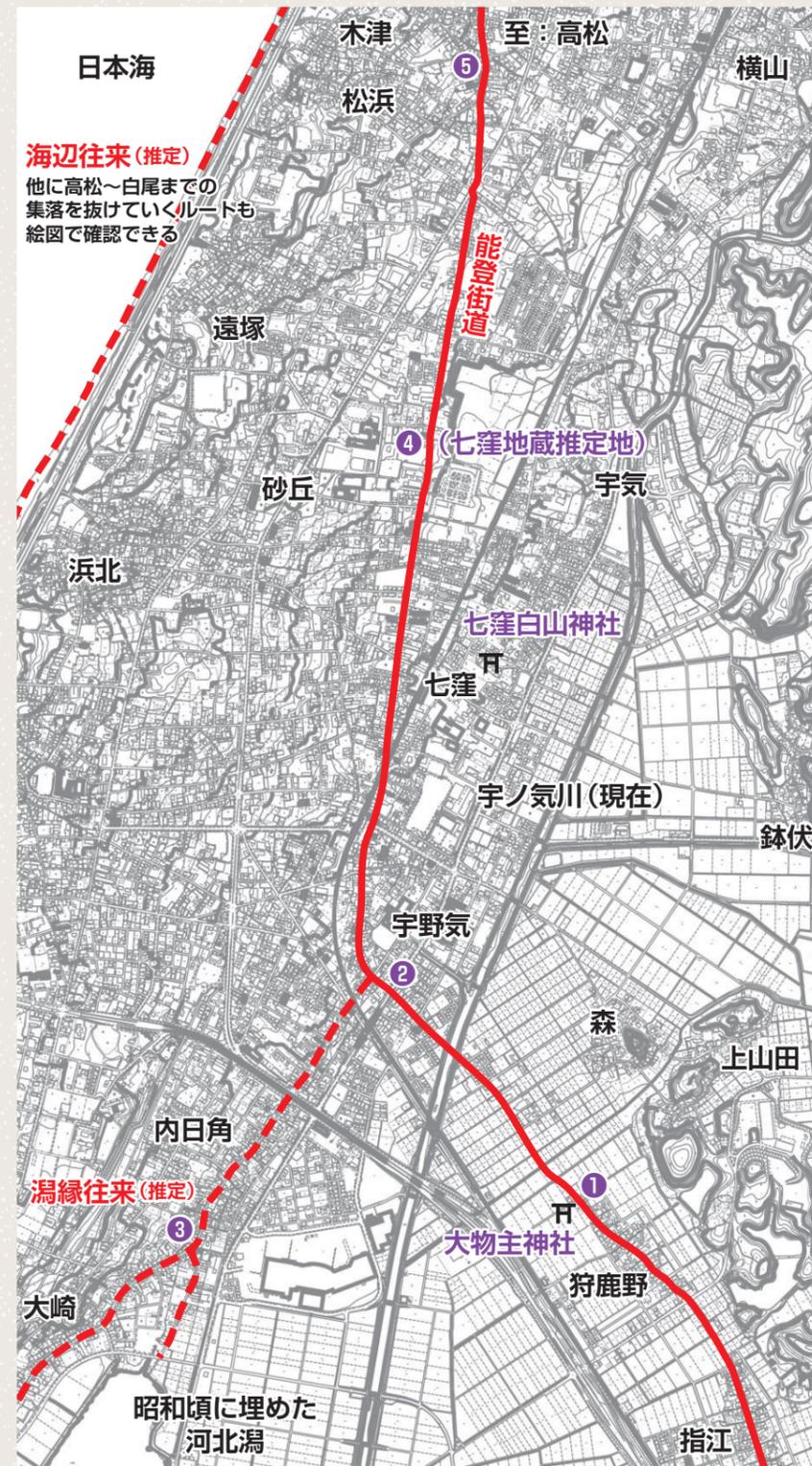


大橋交差点

写真奥から手前に向かって旧宇ノ気川が流れ、写真右から左に向かう道路が能登街道と推定されています。



元文2年（1732）賀州河北郡図籍 金沢市立玉川図書館蔵
宇野気新村の辺りに3つの川が流れ、橋が架かっていたことが分かります。



MAP9 かほく市エリア1 (宇野気～木津)

3 内日角道標跡と三叉路

江戸時代の「宇野気新村」からは、舟場のある内日角や大崎へ行くための枝道がありました。そして、内日角の舟場へ向かう道と大崎の舟場へ向かう道へと分岐する所に内日角道標跡があり、現在も当時の道の名残を残しています。また、この大崎へと向かう道は、内灘町の室、荒屋、宮坂、大根布、本根布、向栗ヶ崎へと至る「潟縁往来」と呼ばれる道となるものとみられます。



三叉路

電気屋のところに内日角道標跡がある。写真の右が「内日角の舟場へ」、写真の左が「大崎」へと道が続く。

4 砂丘を通る能登街道と七窪地蔵

「宇野気新村」を抜けた能登街道は、七窪など砂丘を通り木津方面に向かいます。そして七窪あたりの砂丘は、「砂が吹き上げ、山のように高く、段々の畦をなし、東西が見回せない」など旅人が迷う交通の難所であったといわれています。そのため、享保9年（1724）に加賀藩十村役の渡邊弥右衛門永忠によって、砂丘を行き来するための目印として往来の安全を祈願し「七窪地蔵」が街道筋に建てられました。

現在の「七窪地蔵」は、もともとの場所から移動し、七窪白山神社で祀られています。



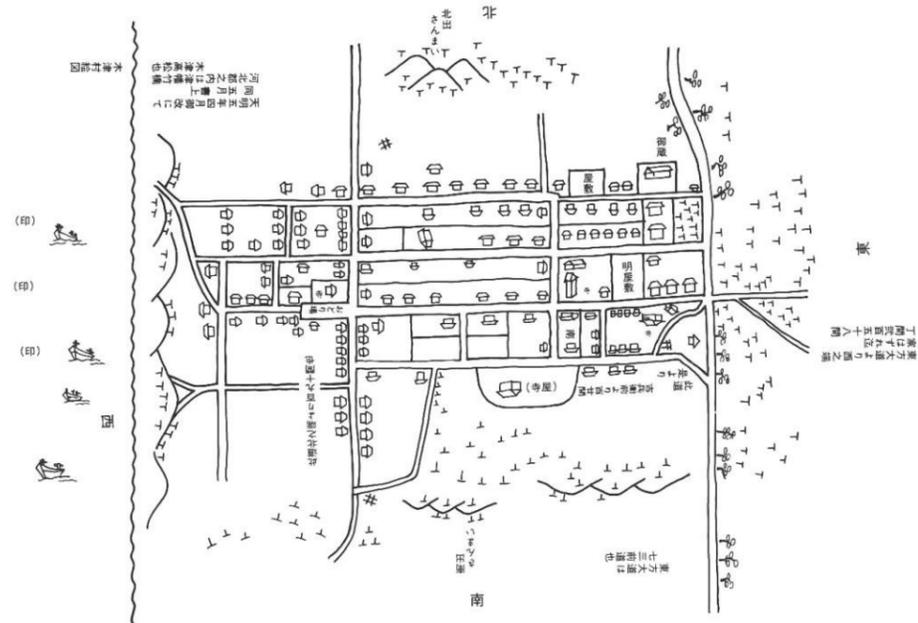
七窪地蔵（市指定文化財）

地蔵の背中に製作した年月や目的などが彫られています。

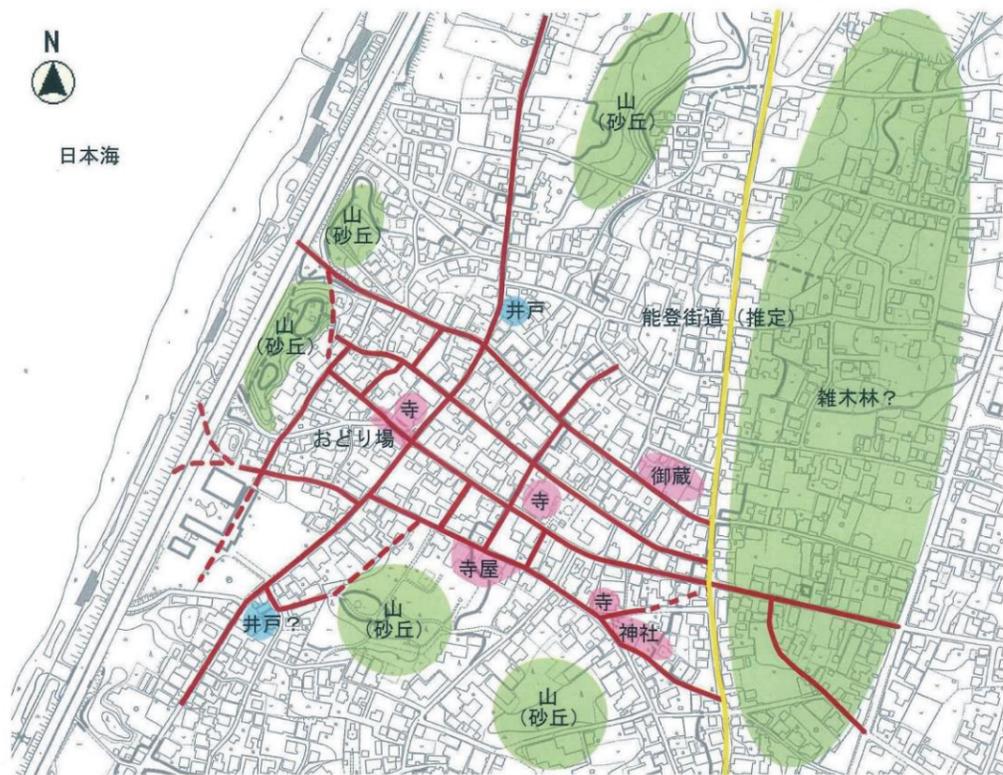
きつどうひょうあと
⑤木津道標跡と松の並木

七窪を抜けた能登街道には、木津に向かう道と能登街道の分岐点に木津道標が建っていました。また天明5年（1785）の木津村絵図をみると、村の東に松の木が並ぶ道が描かれていることが分かります。加えて、文化14年（1817）の『能登日記・乾』には、七窪を過ぎて木津の辺りは、道の左右に松が植えられていて、後年には七窪まで松が広がったという記述がみられます。

現在は、木津道標や松の並木も無くなってしまい、住宅が広がりますが、能登街道と推定される道の名残りが今も見られます。



天明5年（1785）木津村絵図
 写しで書き下したもの

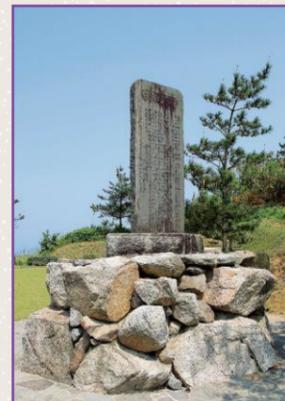


MAP10 天明5年(1785)木津村絵図と現代の比較

木津の開発が進みつつも、当時の道が現代も残っていることが読み取れます。

8. 能登街道を歩く (かほく市エリア2 高松地区周辺)

このエリアは、能登街道にある宿場高松になります。その成り立ちを見ると、桜井三郎左衛門と前田家が関係していたといわれています。戦国時代の天正12年（1584）、前田勢と佐々勢の末森城合戦の際、高松村の桜井三郎左衛門が、前田軍を末森城まで案内し、前田軍の勝利に大きく貢献したという話があります。その結果、前田家は高松村に「永代地子銀免除」の特権を与え、宿場として発展していく契機の一つになったといわれています。



口銭場之碑

こうせんばのひ
⑥口銭場之碑

高松の入口には、塩干物や鮮魚を運んで通行の際に税を徴収する「口銭場」がありました。そして「口銭場」の付近には宿屋や小料理屋が並んだ「口銭茶屋」があり、そこでは、商船に雇われた人や関西へ酒造りに行く能登杜氏の一行などが、見送りの人々と別れの盃を交わしたといわれています。

現在は、その面影を残してはいませんが、これらを偲び、昭和38年（1963）に口銭場之碑が建てられました。



桜井三郎左衛門の像

さくらいさぶろうざえもん
⑧桜井三郎左衛門の像

この像は、高松の発展の礎となったことを後世に伝えるため、高松産業文化センターの横の小さな広場に建てられました。

他にも、桜井家は江戸時代に各村々のまとめ役である「十村」として活躍し、これまで水の供給が困難であった長柄野(台地)で米作りをするため「長柄用水」の建設など地域に大きく貢献しました。



宿場の面影を残す高松

⑦宿場高松

能登街道は、宿場高松の中央の通り（中町通り）を抜けていきます。江戸時代、この中央の通りに面するように「若杉屋」や「鶴屋」、「鶴屋」といった旅籠や有力な商人の家々が額神社周辺に並んでいました。江戸時代中期には200軒近い家々が街道を挟んで建ち並び、馬も40頭程常備されていたとの記録もみられます。

現在は、多くの家々が立て替えられましたが、大町通りとして能登街道は残り、宿場としての面影を残した民家もわずかながらみられます。



MAP11 かほく市エリア2 (高松周辺)

※国土地理院の電子地図に加筆掲載

9. 北国街道(北陸道)の概説

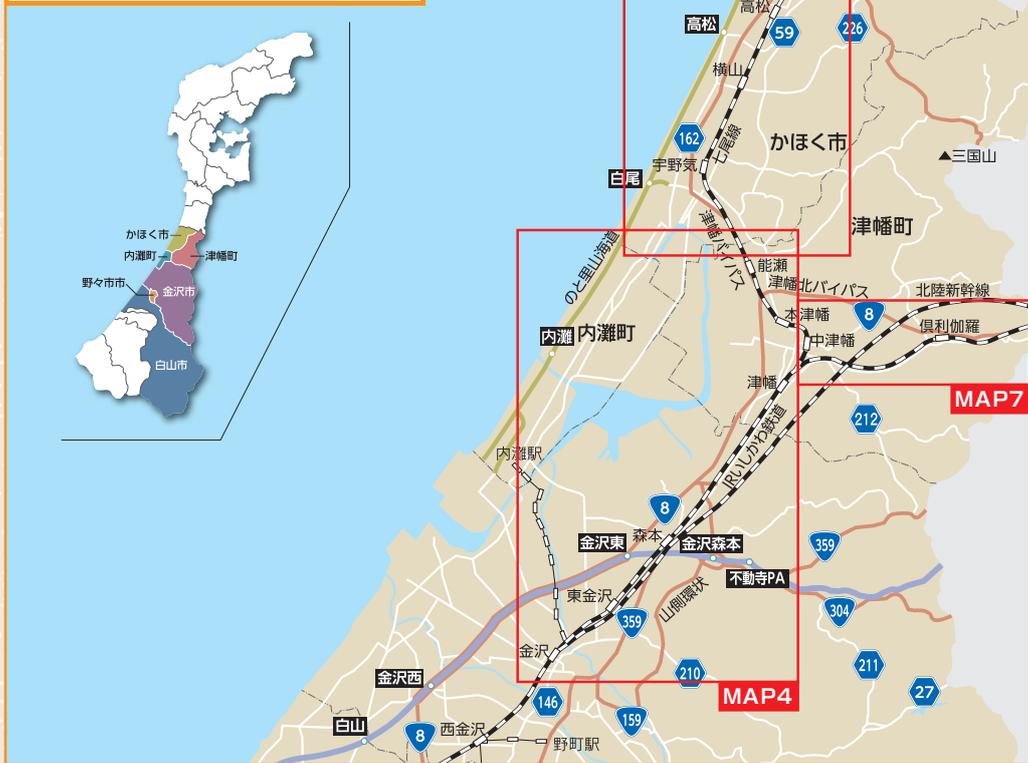
古代から中世にかけては主に北陸と京都を結ぶ街道でしたが、近世においては、江戸への参勤交代にも利用されるようになり、越後直江津や同高田城下(新潟県上越市)から中山道との分岐点である信濃追分(長野県軽井沢町)への道筋が整備されました。この街道は、佐渡の金を江戸に運ぶためにも使用されたため、幕府から重要視されていました。戦国時代に上杉謙信などが信濃方面へ遠征する際に使用された道筋が元になっているようです。一方、越前から近江や美濃方面にかけては、越前今庄(福井県南越前町)から栃ノ木峠を越えて中山道の近江鳥居本(滋賀県彦根市)もしくは美濃関ヶ原(岐阜県関ヶ原町)へ至る道筋が中世以来整備されており、北陸から京都、また江戸へと向かう街道として利用されていました。加賀藩領内では一般に往還道(往還・往来・筋とも)と標記されました。また金沢城下より東方の越中へ向かう道筋を下街道(往還)、西方の越前へ向かう道筋を上街道(往還)とも呼んでいたようです。加賀国内の宿駅としては、橋、大聖寺、動橋、月津、小松、寺井、粟生、水島、源兵衛島、下柏野、荒屋柏野、松任、野々市、金沢、津幡、竹橋があり、伝馬制(適切な間隔で設置された宿駅間を人馬を交替して運ぶ制度)によって公用の通行に人馬が備えられていました。加賀藩は、宿駅を保護するために様々なお触れを出していたことが文献史料からわかっています。



図 北国街道全ルート
(野々市市観光物産協会刊行パンフレット「北国街道をあぐる」より)

石川県内において近世の北国街道を示す史跡として、津幡町「北国街道俱利伽羅峠道」、金沢市「松並木の旧下口往還」、能美市「吉光の一里塚」の県指定史跡があり、往時の姿を今に伝えています。なお、北国街道とその脇街道の二俣越・小原越・田近越は「歴史の道百選」にも選定されています。

石川中央都市圏 全体図



交通ガイド

【主要都市からのアクセス】

【金沢駅からのアクセス】

電車 IRいしかわ鉄道 JR七尾線 13分	バス 東口から 北陸鉄道バス 宇野気駅行 26分	電車 北陸鉄道 浅野川線 17分
---------------------------------------	---	----------------------------------

津幡(津幡駅)	内灘(内灘駅)
電車 JR七尾線 14分	バス 北陸鉄道バス 宇野気駅行 27分

かほく市(宇野気駅)

※本書は、石川中央都市圏(金沢市、白山市、かほく市、野々市市、津幡町、内灘町)が地域資源の魅力向上に向けて圏域内の歴史遺産の保存活用に連携して取り組む事業として作成したものです。

【発行】金沢市文化財保護課 【編集】石川中央都市圏歴史遺産活用連絡会 【発行日】令和5年10月20日発行
【お問い合わせ】金沢市埋蔵文化財センター 金沢市上安原南60番地 TEL 076-269-2451 Fax 076-269-2452